

初等・中等教育の進路指導、キャリア教育における進路学習に関する実証的研究 —— 性差、進路分化に注目して ——

神戸松蔭女子学院大学人間科学部 長谷川 誠

抄 録

本稿の目的は、初等、中等教育の進路指導、キャリア教育における進路学習に関する調査分析を通じて、キャリア教育の課題と展望について検討することである。研究方法は、大学生、専門学校生への回顧調査の結果を、性差や進路先によって進路学習の記憶や評価に差があるかどうか検証するものである。分析の結果、性差、進路先の違いによって差がみられ、全体として女性の進路学習に対する評価が有意に高く、自身のキャリア形成に有益であったと回答していた。

また、これまで女性は特有のライフコースを考え、職業資格の取得に関心を持ちキャリア形成をする傾向があるとされていた。しかし、本調査では、職業レリバンスの弱い大学に進学した女性が、職業資格の取得を目指す専門学校へ進学した女性より、高校の進路学習を高く評価していたのである。この点については、近年、女性を取り巻く環境が大きく変化する中、女性のキャリア形成に力点をおいた高校段階までのキャリア教育を通じて、女性においてロングキャリアを持つ意識が醸成され始めていることが背景にあると指摘している。

Key Words：キャリア教育、進路学習、性差、進路分化

1. 学校教育におけるキャリア教育への関心の高まり

学校教育においてキャリア教育の重要性が叫ばれて久しい。キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている（文部科学省2011）¹。また、2013年に閣議決定された「第2期教育振興基本計画」²においては、「キャリア教育の充実、職業教育の充実、社会への接続支援、産学官連携による中核的専門人材、高度職業人の育成の充実・強化」を掲げ、初等、中等

教育段階修了までに身につける力として、生涯にわたる学習の基礎となる「生きる力」を確実に育成することと示している（文部科学省2013）。

そして、文部科学省（2011）の「中学校のキャリア教育の手引き」³には、キャリア教育が必要となった背景や課題について、ひとつは学校から社会への移行をめぐる課題として、①社会環境の変化、②若者自身の資質等をめぐる課題をあげている。社会環境の変化とは、新規学卒者に対する求人状況の変化や、雇用システムの変化があげられるが、これは、1990年代後半以降から続いた長い経済不況と労働市場を

取り巻く環境の変化を起因とした雇用不安、とりわけ若年層の就労問題が背景にあった。例えば、大学新卒者の就職率は、1990年前後のバブル経済期において80%を超える数値を示していたが、経済破綻後、1995年に70%を下回り、2000年には55%前後まで落ち込んだのである（文部科学省学校基本調査2016）。以降は、緩やかに回復傾向にはあるが、先行きは不透明な状況である。一方、高校新卒者の状況をみると、1990年前後の求人倍率は3.3倍程度を示したが、2000年には1.16倍まで落ち込み、以降は大学同様、緩やかに回復はしているものの、依然として2.0倍前後を推移している（厚生労働省2016）⁴。また、1998年に大卒就職者が高卒就職者数を上回った背景には、販売や一般事務など、かつての高校生の職場に、大卒者が侵入してきたことも指摘されており⁵、企業の採用行動の変化等も大きく影響しているのである。

いまひとつの若者自身の資質等をめぐる課題については、勤労観、職業観の未熟さと確立の遅れや、社会人、職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れなどがあげられている。文部科学省（2011：2）は、「子どもの進路選択において、保護者が進路や職業に関する情報を十分に得られず、また、学校における進路指導が、大学進学を第一としたものに偏りがちであるとの指摘もある。この背景にある、職業に関する教育に対する認識の不足や、ある時点での専門分野・職業分野の選択がその後の進路を制限するという消極的な固定概念から脱却し、職業に関する教育をより重視していかなければならないことを、社会全体で認識していく必要がある」と指摘し、さらには「若者の社会的・職業的自立や、学校から社会・職業への円滑な移行に向けた支援は、関係機関が連携して取り組む必要があり、その中で学校が果たす役割が重要である」と述べている。つまり、学校の進路

指導において大学進学が優先され、勤労観、職業観の形成に対する意識が薄くなることで、将来的に社会的自立に向けた職場定着が難しい状況を招いているとすれば、当然、その是正が必要となる。学校現場においては、産学官、地域社会と連携を通じた勤労観、職業観の育成に対する意識を高めることが求められているのである。

この勤労観、職業観は、特別活動や総合的な学習の時間における様々な取り組みを通じて育成されるものである。特別活動の学習指導要領では学級活動の目標と内容において次のように示されている⁶。「学ぶことと働くことを通した人間としての生き方について自覚、日々の学習と進路の選択に主体的に取り組む態度や能力の育成、望ましい勤労観・職業観の形成、将来の生き方と進路の適切な選択などについて取り上げていく」とし、学習指導要領では、①学ぶことと働くことの意義の理解、②自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用、③進路適性の吟味と進路情報の活用、④望ましい勤労観・職業観の形成、⑤主体的な進路の選択と将来設計、の5つの項目が示されている（文部科学省2008）。他方、総合的な学習の時間における内容の取扱いについては「職業や自己の将来に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、自己を理解し、将来の生き方を考えるなどの学習活動が行われるようにすること」に配慮することと明記された（文部科学省2009）⁷。このように、学校教育のキャリア教育においては、こうした要素を含めた進路学習を通じて、例えば、ポートフォリオによる自己評価をしながら、主体的に進路を決定する力を身に付けることを目指している。

本稿では、こうした動向を背景におきつつ、初等・中等教育の進路指導、キャリア教育に関する調査を通じて、進路学習の効果と課題について検討することを目的とする。

2. キャリア教育における性差, 進路分化への注目

学校から社会へのスムーズな移行を果たすことが、キャリア教育の成果のひとつといえる中で、近年の動向において注目しなくてはならないのは、キャリア教育と性差の問題である。文部科学省（2012）は、学校から社会・職業への円滑な移行を図るためのキャリア教育・職業教育を充実するとともに、女性が将来、希望の職業に就職し、将来のライフイベントを踏まえた人生設計（ライフプランニング）が行えるように支援するとした⁸。この背景には、産業構造や就業構造の変化の観点からみた女性就業者について、近年、様々な制度の整備が進む中でも、一般的に、固定的な性別役割分担意識や出産・育児等の影響の下で、正規雇用以外の雇用形態である者の比率が正規雇用者の比率より多くなっているとの指摘もなされており（文部科学省2011）⁹、女性がキャリアを形成していくには、未だクリアすべき課題が多いことがある。また、こうした現状においては、例えば、社会・職業への移行を目前とした高校生の将来の希望職業をみると¹⁰、男女ともに資格、免許の取得が条件となる職業が上位となっており、なかでも女性は、1位看護師、2位保育士、幼稚園教諭、幼児保育関連、3位教師となった。男性は1位公務員、2位教師、製造業、3位建築士、建築関連となっている（リクルート2015）。

他方で、性差の問題は、進路分化と関連しているとの指摘がある。先のリクルート調査からみてもわかるように、とりわけ女子については職業決定において資格取得が優先される傾向が強い。男女ともに上位に入る教師（ここでは初等、中等教育）は、基本的に4年制大学が前提となるが、看護師、保育士、幼稚園教諭については4年制大学の他、短期大学、専門学校も選択肢として考えることができる。この点につい

て林未央（2007）は、進路決定の男女差について検証した結果、男子に比べて女子は、大学、短大、専門学校のどの進路を選択するにしても志望する職業や学問分野と密接に結びついていると論じている¹¹。また、片瀬一男・元治恵子（2008）の研究でも、保育士や看護師、教員といった「女性向き」の専門職は、結婚・出産によって退職し、子どもが成長したのち再就労するといったライフコース展望をもっていることが多いことを明らかにしている¹²。ここから、将来の就労を見据えた高校生の進路決定と性差は、密接に関連し合っていることがみてとれる。そして、長谷川（2016）は、高卒後の進路選択行動について検証した結果、女子は、男子に比べて将来の目標を明確に設定しながら自身の進路選択を熟慮している傾向が強いことや、片瀬、元治が指摘する女子特有のライフコース展望を考慮しながら、現実的、実務的な進路選択をしており、無理に大学進学を選択しない層の存在を明らかにしている¹³。つまり、大学、専門学校の進路分化の側面においても性差は影響していると考えられるのである。

では、性差の視点から、小学校、中学校の義務教育段階から高校までのキャリア教育を通してみたい。徳岡大・山縣麻央ら（2010）の研究によると¹⁴、小学生（5年、6年）のキャリア意識において人間関係形成、情報活用、将来設計の3領域で女子が男子よりも有意に高いことが明らかとなっている。また、富永美佐子（2009）の研究では¹⁵、進路選択能力、進路選択自己効力、進路選択行動の3要因の学校段階ごとの変化を性差で分析した結果、女子は学校段階が上がるごとに進路選択能力、進路選択行動ともに増加しており、進路選択自己効力だけが大学で若干減少している一方で、男子は、進路選択能力は中学から高校にかけて減少し、高校から大学にかけて増加しているが、進路選択自己効力と進路選択行動は中学から高校にかけ

て増加するものの、高校から大学で進路選択自己効力は減少を示すなど、男女で異なることが明らかになったのである。つまり、これらの先行研究からいえることは、女子については小学校から高校にかけて段階的にキャリア形成がおこなわれるのに対して、男子は、小学校時において女子よりもキャリア意識が低いことや、中学校以降についても、女子に比べて複雑であることがみてとれるのである。いずれにしても、キャリア教育を通じた勤労観、職業観の形成を考える際には、現実の就労環境をふまえた生徒自身の進路選択の状況を把握した上で進める必要があるといえる。

そこで、今回、初等、中等教育のキャリア教育で行われる進路学習に注目し、進路学習が性別や高卒後の進路決定に影響を与えているかを検証することを目的に調査を実施。ここまでみてきたように高校までのキャリア意識は女子が男子より高いことや、職業意識も女子が高いことをみれば本調査でも、これに近い結果が予想される。

次節以降では、以上のことをふまえつつ、大学生、専門学校生への調査を通じて、進路学習の記憶や評価について、性差や進路先によって違いがみられるのか検証し、その後、キャリア教育の課題と展望について検討してみたい。

3. 初等・中等教育のキャリア実践に関する調査分析

【調査の概要】

調査時期は、2016年9月～12月。調査対象は男性190名（大学生：167名・専門学校生：23名）、女性195名（大学生：104名、専門学校生：91名）である（但し、2名は中学卒業後、高等学校卒業程度認定試験を利用）。また、本調査は、2大学、1専門学校から協力を得て、授業内で調査用紙を配布し、その場で回収をした。なお、調査実施にあたっては、回答を通じ

て個人が特定されることはないことや、調査の途中でも本人の自由意思で取りやめることが可能なことを伝え、論文への記載への理解と了承を得た上で実施した。

【調査項目】

調査項目の基本情報は、所属学部学科、性別について聞いている。調査対象となった大学の学部系統は、工学系・情報系（男性167名）、家政系（女性68名）、経営系（女性36名）（所属学部学科名称によって大学が特定される可能性があるため分野で示す）であり、専門学校は栄養士養成を目的とした学校である。質問については、質問①「小学校・中学・高校時代に、将来の進路や職業について学習したことがありますか？」（進路学習の記憶）。質問②「小学校、中学・高校時代に、進路や職業について学習したことは、進路選択にどの程度役立ちましたか？」（進路学習の評価）、の2点について聞いた。

そして、質問①については、「5. かなり覚えている」「4. やや覚えている」「3. どちらでもない」「2. あまり覚えていない」「1. ほとんど覚えていない」。質問②については「5. かなり役立っている」「4. やや役立っている」「3. どちらでもない」「2. あまり役に立っていない」「1. 役立っていない」で回答を得ている。

【調査結果】

表1、表2は、進路学習の記憶と評価について学校種別で集計したものである。カイ二乗検定の結果、進路学習の記憶、評価ともに学校種によって有意な差が認められた。進路学習の記憶をみると、小学校では「ほとんど覚えていない」の割合が高く、中学校の「やや覚えている」、高校の「かなり覚えている」の割合が他に比べて高かった。やはり回顧調査であること

表1 進路学習の記憶に関するクロス集計

	小学校 (n=385)	中学校 (n=385)	高校 (n=383)
かなり覚えている	2.1%	10.1%	22.4%
やや覚えている	8.3%	34.5%	25.7%
どちらともいえない	9.0%	11.2%	10.1%
あまり覚えていない	28.1%	24.4%	26.0%
ほとんど覚えていない	52.5%	19.8%	15.8%
	100.0%	100.0%	100.0%

($\chi^2 = 62.623$, $df = 8$, $p < .001$)

から，現在に近づくにつれてキャリア教育の記憶が残っていた。一方，進路学習の評価をみると，小学校では「かなり役立っている」の割合が他に比べて高かったが「やや役立っている」の割合は少なく，「役立っていない」は高い結果となった。これに対して高校では，「あまり役立っていない」の割合と「やや役立っている」の割合が他と比べて高い結果となり，中学校では他の学校種と比べて目立った項目はなかった。このように，進路学習の評価については，同一校種内においても，評価が分かれていることがうかがえるのである。

次に，学校種別の進路学習の記憶，評価について性別，進路別によって差がみられるかについてt検定をおこなった。進路の記憶をみると（表3参照），小学校では性別によって有意な差

表2 進路学習の評価に関するクロス集計

	小学校 (n=385)	中学校 (n=385)	高校 (n=383)
かなり役立っている	21.0%	11.9%	9.1%
やや役立っている	11.9%	22.6%	26.5%
どちらともいえない	26.2%	31.7%	23.6%
あまり役立っていない	14.5%	17.1%	29.4%
役立っていない	26.4%	16.7%	11.4%
	100.0%	100.0%	100.0%

($\chi^2 = 24.707$, $df = 8$, $p < .001$)

はみられなかった（ $t = 0.86$, $df = 383$, $n.s.$ ）。また，中学校と高校ではいずれも有意な差がみられ，（同（ $t = -2.52$, $df = 383$, $p < 0.05$ ），同（ $t = -12.72$, $df = 383$, $p < 0.001$ ）），どちらも男性より女性が記憶しており，とくに高校では1.5ポイント程度の差がみられた。次に「進路学習の評価」をみると（表4参照），小学校，中学校，高校ともに有意な差がみられ（同（ $t = 13.69$, $df = 383$, $p < 0.001$ ），同（ $t = 6.04$, $df = 383$, $p < 0.001$ ），同（ $t = -4.35$, $df = 383$, $p < 0.001$ ）），小学校，中学校では男性が高く，高校では女性が高かった。

続いて，学校種別の進路学習の記憶，評価について進路別での違いをみてみたい（表5，6参照）。進路学習の記憶をみると，小学校，中学校においては有意な差がみられず（同（ $t = 1.44$,

表3 学校種別の「進路学習の記憶」について性別の平均値とSD及びt検定の結果

	男性		女性		t 値	
	M	SD	M	SD		
小学校の進路学習の記憶	1.85	1.16	1.76	0.97	0.86	n.s
中学校の進路学習の記憶	2.74	1.35	3.08	1.30	- 2.52	*
高校の進路学習の記憶	2.33	1.26	3.89	1.13	- 12.72	***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表4 学校種別の「進路学習の評価」について性別の平均値とSDおよびt検定の結果

	男性		女性		t 値	
	M	SD	M	SD		
小学校の進路学習の評価	3.72	1.33	2.04	1.06	13.69	***
中学校の進路学習の評価	3.33	1.23	2.60	1.15	6.04	***
高校の進路学習の評価	2.66	1.19	3.17	1.10	- 4.35	***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表5 学校種別の「進路学習の記憶」について進路別の平均値とSDおよびt検定の結果

	大学		専門学校		t 値	
	M	SD	M	SD		
小学校の進路学習の記憶	1.86	1.10	1.68	0.10	1.44	n.s.
中学校の進路学習の記憶	2.92	1.31	2.89	1.39	0.22	n.s.
高校の進路学習の記憶	2.86	1.44	3.74	1.19	- 5.72	***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表6 学校種別の「進路学習の評価」について進路別の平均値とSDおよびt検定の結果

	大学		専門学校		t 値	
	M	SD	M	SD		
小学校の進路学習の評価	3.31	1.39	1.82	1.04	11.65	***
中学校の進路学習の評価	3.24	1.91	2.31	1.11	7.12	***
高校の進路学習の評価	2.87	1.14	3.04	1.24	- 1.36	n.s.

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表7 分散分析表

変動要因	SS	df	MS	F	P
性別	3.242	1	3.242	2.541	n.s.
進路別	1.694	1	1.694	1.328	n.s.
性別×進路別	14.854	1	14.854	11.643	***
誤差	484.79	380	1.276		
全体	524.497	383			

*** $p < .001$

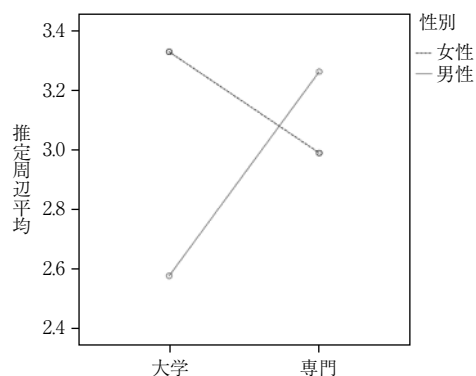


図1 交互作用分析の結果

df = 383, n.s.), 同 (t = 0.22, df = 383, n.s.)), 高校では専門学校が有意に高かった (同 (t = - 5.72, df = 383, $p < 0.001$)). 次に「進路学習の評価」をみると, 小学校, 中学校は大学が有意に高かった (同 (t = 11.65, df = 383, $p < 0.001$), 同 (t = 7.12, df = 383, $p < 0.001$), 一方で, 高

校は有意な差はみられなかった (t = - 1.36, df = 383, n.s.)).

さらに, 高校段階の進路の評価について性別および進路別の違いによって, 平均得点に違いがあるかどうか検証するために, 独立変数を性別, 進路別, 従属変数を進路学習の評価とし, 二要因の分散分析をおこなった。その結果, 性別要因の主効果 ($F(1, 380) = 2.541, n.s.$) 及び, 進路別要因の主効果 ($F(1, 380) = 1.328, n.s.$) は有意ではなかったが, 統計的に有意な交互作用が認められ ($F(1, 380) = 11.643, p < 0.001$), 高校の進路学習の評価については, 大学では男性より女性が高く, 専門学校では女性より男性が高いことが示された (表7, 図1参照)。

次節では, ここまでの調査結果を整理し考察を進めることとする。

4. 考察

本稿で明らかになったのは、次の3点である。

1点目は、進路学習の記憶、評価について性別でみると、中学校の記憶では女性が有意に高く、評価では男性が有意に高かったが、高校では記憶、評価ともに男性より女性が有意に高かったことである。

2点目は、進路学習の記憶、評価について進路別でみると、記憶では、小学校、中学校ともに進路別での違いはなく高校で専門学校が有意に高かった。一方で、評価については小学校、中学校ともに大学が専門学校より有意に高かったが、高校では進路別での違いは認められなかったことである。

3点目は、高校の進路学習の評価について二要因の分散分析の結果をみると、交互作用が認められ、大学では男性より女性が高く、専門学校では女性より男性が高いことが示されたことである。

これらをふまえて、議論を進めてみたい。まず、小学校の進路学習の記憶において8割程度の者が覚えていないと回答していることは、本調査が回顧調査であることが影響していると考えられる。その中で、評価については3割程度の者が役に立っていると回答している点は、慎重に検討する必要がある。「覚えていない」が、「役に立っている」と回答した者の中で10名にヒアリングをした結果、「内容についてはあまり覚えてはいないけど、キャリア教育を受けてきたことは役に立っていると思う」や、「何がキャリア教育だったのかが、よくわからないけど、きっと役にたっているのだろう」といった回答が得られた。つまり、職場体験活動や具体的に将来の仕事を意識しながらキャリア教育を受けていた中学校、高校時に比べて、小学校のキャリア教育は、かれらにとってわかりにくいといった印象があることがうかがえる。この点

についての検討は次回に譲りたい。

次に、性差の観点からみると、中学校と高校の進路学習の記憶、評価において、男性は下降し女性は上昇していることがみられ、女性については記憶、評価ともに学校段階が上がるにつれて数値も上昇している。この点は、先述の富永の指摘に符合しており、性差による違いが明確に示された。また、高校時における進路学習の記憶と評価が、いずれも女性が高い結果をみると、行政側も女性が働きやすい環境を整備しようと積極的に取り組んでいるとはいえ、未だ女性がキャリアを形成するために解決しなければならない課題が多い状況にあることを、女性自身が深刻に受け止めていることがみえてくる。その背景には、女性は、男性に比べて、結婚、出産、育児等の女性特有のライフコースを念頭に置きつつ、自身のキャリア設計を描く傾向が強いため¹⁶、社会への移行が間近に迫る高校の進路学習への関心が高くなり、記憶、評価ともに高い結果が出ることが考えられる。

続いて、進路分化の観点からみると、小中学校の進路学習の記憶、評価において専門学校が大学より高い傾向があったことは、対象の専門学校が職業レリバンスの強い学校であり、生徒自身が進路学習を通じて将来の仕事を意識するようになったことが結果に表れたといえ、少なからず進路学習が勤労観、職業観の育成につながっていると捉えることができる。その中で、高校段階で進路別での差がみられなかったことは、大学に進学した者においても高校段階では自身のキャリアを強く意識する時期を迎えているため、進路先での違いが無くなっていることが考えられる。

こうした状況の中で、高校の進路学習の評価について交互作用分析をした結果では、大学では女性が高く、専門学校では男性が高かったことは大変興味深い。なぜなら、今回の調査対象となった大学の学部系統において女性の比率が

高かったのは家政系、経営系と職業レリバンスの弱い分野であった。その中で、大学では女性が高く、職業レリバンスの強い専門学校では男性が女性より高いことは、女性は自身のライフコースを描きながら進路選択をする傾向が強いという指摘をどのように捉えたらよいのか、再考を迫ることにつながると考えられるからである。すなわち、先行研究においても触れられていたが、女性のキャリア設計においては、職業資格の取得に関する分野に対する関心を高く持つ傾向があり、それは女性特有のライフコースを念頭においていることが影響していることが大きい。しかし、このように職業レリバンスの弱い大学において女性が有意に高く、職業レリバンスの強い専門学校において男性が有意に高いことは、こうした従来の進路選択における性差の特徴と一致していない。

この点について木村誠（2017）は、女性のライフサイクルの変化と多様化を背景に、近年の女子大生は、自立した女性の基本条件である、生涯におけるロングキャリアという視点から進路を考えるようになったと指摘する。加えて、その内実として、過去においては、同じ職業や職場で働き続けるのは医師、教師などの専門職の女性が多かったが、最近では、企業内においても結婚、産休後に復職をする女性が、総合職だけでなく一般職でも増えてきていると述べている¹⁷。つまり、女性においては、生涯を通じたキャリア形成の視点から、社会情勢をふまえた上で、客観的な自己評価を行い、従来のような職業資格の取得や専門職に就くこと以外の進路にも関心を持ち始めている可能性が示唆されたのである。

また、日本経済再生本部産業競争力会議（2014）の「女性活躍推進に関する文部科学省の取組について（文部科学省提出資料）」をみても、女性が活躍できる社会を目指して各教育段階を通じた人材育成が進められる中、外部人

材を活用したロールモデルの提示等、女性のキャリア形成を支援するなどの取組みがなされている¹⁸。また、こうした取り組みは、男女共同参画社会の推進が背景にあり、学校現場においては、特別活動や総合的な学習の時間を通じて、人格形成教育や人権教育を視点においたキャリア教育の内容として、より強化されていくものと考えられる¹⁹。本調査において、大学進学をした女性において高校の進路学習の評価が高かったことは、こうした視点からの進路学習が学校教育現場において浸透していることが要因にあると考えられる。すなわち、女性を取り巻く環境が大きく変化する中、女性特有のライフコースをふまえた様々な選択に対する考え方が変わろうとしており、高校段階までのキャリア教育を通じて、そうした意識が醸成され始めているといえよう。

以上のように、学校段階におけるキャリア教育は、生涯にわたるキャリア設計が重要なテーマとなっている。しかし、これまで学校における進路指導やキャリア教育に影響を与えてきた、例えば、ドナルド・E・スーパーのキャリア発達理論においては、誕生から14歳以下の成長期を3段階に分け、また15歳から24歳までの高等教育機関でも3段階に分け発達課題を設定している。しかし、教育期間が終わると、児童生徒、学生は支援対象から外れてしまうなど²⁰、教育現場におけるキャリア教育、キャリア支援は、教育期間内に限定されていることが問題といった指摘もなされている（労働政策研究所・研修機構2016）。もちろん、スーパーは、キャリア発達においては、教育期間だけでなく、ライフステージとライフロールの組み合わせとしており、菊池武剋（2012）も「日本において展開されているキャリア教育やキャリア形成支援は、スーパーが提唱したライフキャリアとしてのキャリア概念に基づいている」と述べている²¹。つまり、教員側は、単に、次の学

校段階,あるいは職業への接続といった一時点を強調した進路指導(いわゆる出口指導)ではなく,児童生徒の将来を見据えたライフキャリアの観点からのキャリア教育が求められていることを,常に念頭に置いておく必要があるといえる。

5. 本稿の成果と今後の課題

本稿では,初等,中等教育の進路指導・キャリア教育における進路学習について性別,進路分化の観点から分析,検討を進めてきた。その結果,性差の特徴が示された中で,女性の社会進出を強める社会動向を背景に,学校教育において,こうした情勢をふまえた進路学習が浸透し,女性自身において新たなキャリア観が醸成されていることが示唆されたのは,成果のひとつである。一方で,男性については,専門学校生において高校の進路学習の評価が高い結果が得られているが,十分な説明がなされていない。これについては学力の観点からの検討が必要であると考えられる。片瀬一男・元治恵子(2008)は,女子の大学進学率の上昇によって,男子が自分の学力を意識しなくてはならない状況になったと指摘する²²。つまり,女子のロングキャリアの意識が高まる中では,大学新卒者の就職活動においても,激しい競争が繰り広げられることとなる。実際,2017年3月卒業の大学生の就職内定率をみても,男子が96.9%に対して女子は98.4%と高く,私立大学では同96.8%,同98.7%と2ポイント程度女子の方が高かった²³。こうした状況をふまえると,男性においても,自身の学力を冷静に見極めつつ,以前と比べて専門職に対する意識が強まっていることも考えられる。この点については,学力の高低を示すデータを交えながら詳細な分析と検討が必要であり,今後の課題としたい。

<引用文献>

- 1 文部科学省 2011「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」中央教育審議会 p.17
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf: 2017年6月13日アクセス
- 2 文部科学省 2013「教育振興基本計画」
http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afiedfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf: 2014年9月23日アクセス
- 3 文部科学省 2011『中学校キャリア教育の手引き』教育出版 p.10
- 4 厚生労働省「平成27年度 高校・中学新卒者の求人・求職・内定状況」2016
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000116270.html>: 2017年6月12日アクセス
- 5 安田雪 2003『働きたいのに…高校生就職難の社会構造』勁草書房 pp.14-15.
- 6 文部科学省 2008「中学校学習指導要領解説 特別活動編」ぎょうせい p.39
- 7 文部科学省 2009「中学校学習指導要領等(ポイント,本文,解説等)」第4章 総合的な学習の時間」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sougou.htm: 2017年7月9日アクセス
- 8 文部科学省 2012「女性の活躍による経済活性化を推進するための関係閣僚会議 発表資料」
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/policy09/pdf/20120522/shiry6.pdf>: 2017年7月10日アクセス
- 9 文部科学省 2011 前掲書 p.6
- 10 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ 2015「第7回 高校生と保護者の進路に関する意識調査」
- 11 林未央 2007『進路の男女差の実態とその規定要因』東京大学大学経営・政策研究センター
- 12 片瀬一男・元治恵子 2008「進路意識はどのように変容したのか—ジェンダー・トラックの弛緩?—」海野道郎・片瀬一男『『失われた時代』の高校生の意識』有斐閣 pp.109-113
- 13 長谷川誠 2016『大学全入時代における進路意識と進路形成—なぜ四年制大学に進学しないのか』ミネルヴァ書房
- 14 徳岡大 山縣麻央 淡野将太 新見直子 前田健一 2010「小学生のキャリア意識と適応感の関連」

- 『広島大学心理学研究第10号』
- 15 富永美佐子 2009「進路選択能力, 進路選択自己効力, 進路選択行動の関連－中学生・高校生・大学生を対象に－」『福島大学人間発達文化学類論集 (10)』
 - 16 呉湘 2016「女性のキャリア形成に影響する要因に関する研究－インタビュー調査を通して－」『現代社会文化研究 No.63』 pp.144-145
 - 17 木村誠 2017『大学大倒産時代 都会で消える大学, 地方で伸びる大学』朝日新聞出版 pp.201-202
 - 18 日本経済再生本部産業競争力会議分科会 2014「第7回 産業競争力会議・人材育成分科会配布資料 文部科学省資料」
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/bunka/koyou/dai7/siryou.html> : 2017年8月28日アクセス
 - 19 内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書平成29年度版」
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/shisaku/ss11_03.html : 2017年10月23日アクセス
 - 20 独立行政法人労働政策研究所・研修機構 2016「職業相談場面におけるキャリア理論及びカウンセリング理論の活用・普及に関する文献調査」『JILPT 資料シリーズ No.165』
 - 21 菊池武尅 2012「キャリア教育」『日本労働研究雑誌 No.621』独立行政法人労働政策研究所・研修機構 p.51
 - 22 片瀬一男 元治恵子 2008「進路意識はどのように変容したのか－ジェンダー・トラックの弛緩?－」海野道郎・片瀬一男『〈失われた時代〉高校生の意識』有斐閣 pp.106-107
 - 23 厚生労働省「平成28年度大学等卒業者の就職状況調査 (4月1日現在) について」<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000164865.html> : 2017年8月29日アクセス